



特261  
42  
00  
665

春山育次郎三周年忌法要記事

附錄  
遺稿 筑前畫家村田東圃略傳

始



特261  
665

戒名 柳南院雄峰獨立居士

昭和五年二月二十四日歿  
享年六十五



舊知人等凡そ百四十餘名に發送したる案内状左の如し

拜啓春寒之候愈御清安奉賀候然者來る二十四日史家春山育次郎君捐生三周忌辰に相當致候間同日午後二時市内大學通崇福禪寺に於て法要相營み追慕の意を表し申度候間自然地方御越御序も有之御繰合も出來させられ候はゞ參寺御燒香被下度右御案内迄得意申候敬具追而轉典等御配意なき様申添候

昭和七年二月十五日

友人代表 山内 修一 中村 能道  
梅野 富枝 大熊淺次郎

柳南院雄峰獨立居士三周忌法要

時維れ昭和七年二月二十四日は恰かも春山育次郎君捐生三周年忌辰に相當せり、茲に大祥忌法要を故人の墓碑を建てたる福岡市千代松原崇福禪寺に於て相營み、前住小南惟精老師美濃國伊深正眼寺轉住後、圓通寺兼職月庵老師不在の爲め代つて眞に故人の導師たりし今津勝福寺小田棲雲老師方丈に進拜し、一山末寺心宗庵、壽福寺、天祐寺、東照寺の住持を始め聖福寺龍淵老師代參會あり、余は恭しく發起人に代はり靈前に進み、曾つては故人の百ヶ日忌を追悼し、次で一周忌を追用し、今亦三回忌を迎ふ、烏兔勿々夢の如し、人今去るも雖も英靈在すあり、茲に友人知己相集まり大祥忌の法要を營み、故人の學德業蹟を追慕し感慨無量に堪へざるの情を述べ、併せて故人が生前専ら黒田家の歴史を闡明し、福岡藩維新前後の史實を探討し、地方前賢先哲の事蹟の討究に努めたる勞績からざるを以て、本日之法要に際し舊藩主家黒田長成侯爵閣下より、特に福岡別邸參與西川虎次郎中將閣下を代參として香花料を供へられ焼香を辱ふするは故人の餘榮として地下の靈之れを享けらるべく吾々一同の感激に堪へざる情を告げ、又各方面知己より寄せられたる弔電弔状を捧げて弔辭を述ぶる所あり。夫より數齋なる法要の式に移り、普門品大悲呪誦經回向を修せられ、此間黒田侯の代拜焼香あり、順次參會者一同の焼香あり、座間記念の撮影をなし、之れにて式を了り、別室にて茶菓の饗をなし、故人の追懷談に時を移し散會せり。

當日參會者左の如し

黒田侯爵代理西川虎次郎、聖福寺龍淵謙道老師代、武谷水城、濟生會福岡病院熊谷修、同多賀憲、遠藤甚藏、深見平次郎、福岡日々新聞社阿部暢太郎、同齋田耕陽、同竹林巖、宮川一貫、秦傳次郎、中西金次郎、中原太三郎、平田俱集、小旗陳、永島芳郎、橋詰武生、徳永保太郎、中村能道、山内修一、梅野富枝、村上元子、伴辰子、荒川高子、青柳辰子、兒玉芳子、森磯次郎、廣田徳右衛門、大熊淺次郎。

大 熊 淺 次 郎 識

尙ほ追弔状弔電を寄せられたる各位左の如し

鹿兒島 中村平輔、同上 山口真介、同上 池田米男、同上 五代彌次郎、同上 湯地定敏、久留米 黒岩萬次郎、東京 中村徳五郎、東京 堀田璋左右、同上 時枝誠之、同上 藤井甚太郎、同上 末永節、京都 山田新一郎、長崎 古賀十二郎、美濃 正眼寺小南惟精 下關 加藤七五郎、大阪府 伊集院郁五郎、博多 河内卯兵衛、福岡 岩下知敦。  
尙ほ故人の遺骨を分ち紀州高野山奥の院納骨堂に納め、大圓院に靈牌を奠めたるを以て、此日大圓院に於て別回向を修し追弔せり左の如く大熊宛への書面あり。

拜啓時下春寒之候御全家益々御清祥之段大賀之至りに奉存候扱て御依頼の柳南院様三回忌法要は二十四日に御座候へば當日は年回別回向御勤め申候左様御承知被下度御書面に依れば當日は崇福寺にて御法事御勤めの由佛の爲め誠に喜ばしく存候先は御返事まで如此候 勿々

二月二十二日

和歌山縣高野山 大圓院

### 春山氏三回忌

福岡日日新聞記事抄録 昭和七年二月二十五日所載

故春山育次郎氏三回忌法要は友人 大熊淺次郎、中村能道氏等發起にて二十四日午後二時福岡市東公園崇福寺にて嚴修された、糸島今津勝福寺住職其他の讀經あり主催者大熊氏弔詞を述べ黒田侯爵代理西川中將、武谷軍醫監、宮川代議士、遠藤甚藏、小旗陳秦傳次郎、山内修一、梅野富枝、村上、伴兩女史、木社員等多數焼香あり、尙故人が歴史家だけに史學者堀田璋左右、藤井甚太郎中村徳五郎、古賀十二郎並に京都山田新一郎諸氏其他の弔電があつた。

(編者曰く記事執筆に就て阿部彌朝長に感謝す)

### 故春山育次郎氏の三周年追悼會

鹿兒島新聞記事抄録 昭和七年二月十九日所載

當市出身の明治維新史研究家として造詣深かりし故春山育次郎君が福岡に於て卒去せしから来る廿四日は三周年忌に該當するを以て福岡市の史家大熊淺次郎、梅野富枝、中村能道、山内修一諸氏發起となり、同日午後二時より同市内大學通崇福禪寺に於て柳南院雄峰獨立居士(春山氏法名)の第三周年追悼會を營む由にて故人の故舊知己多數參列すべしと

(編者曰く記事執筆に就て池田米男氏に感謝す)

### 春山氏三周忌

福岡時事記事所載 昭和七年二月二十四日抄録

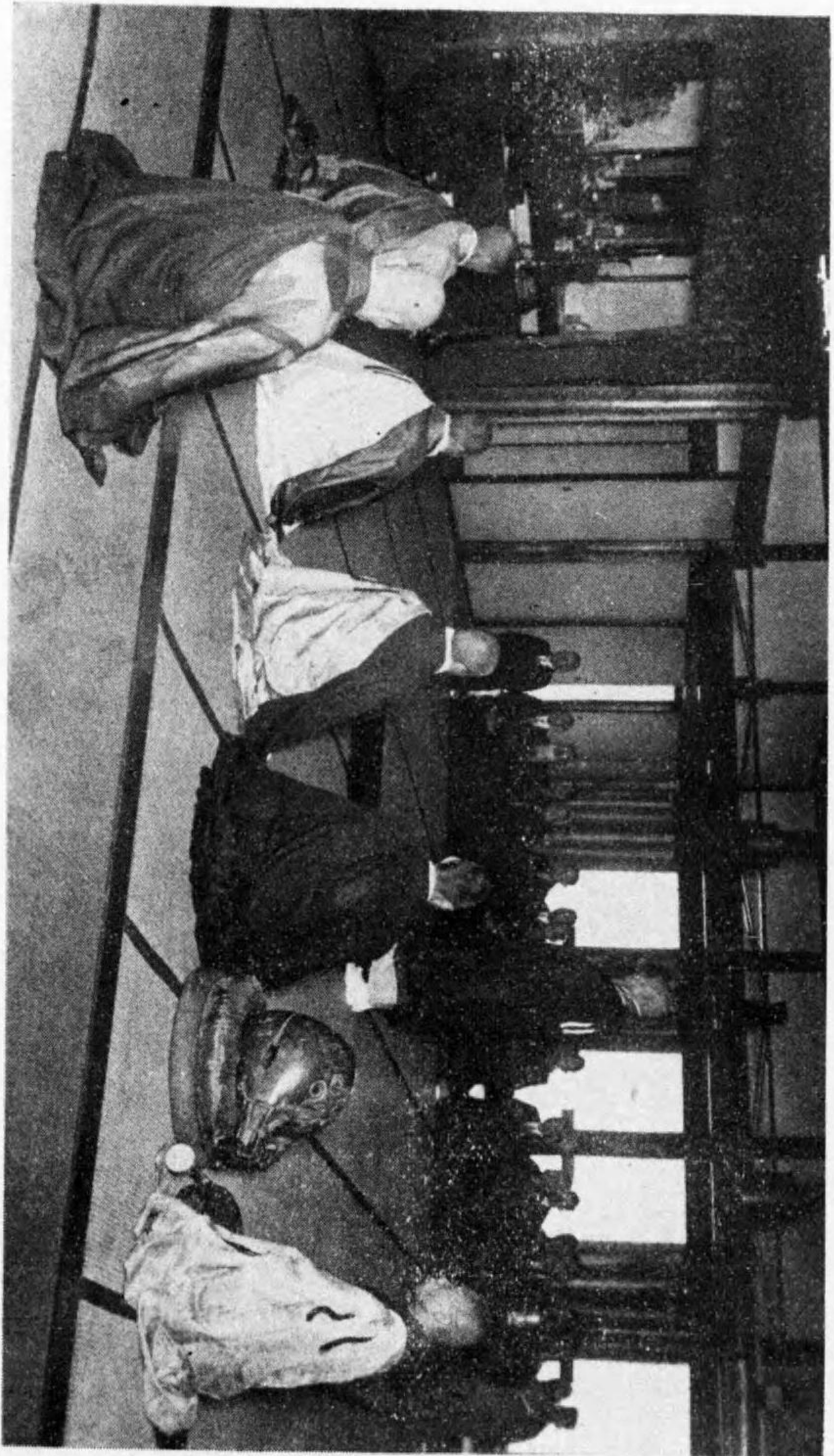
今二十四日は史家春山育次郎氏の三周忌に相當するので、大熊淺次郎氏を始めとして氏の友人等が相寄り當日午後二時より市内大學通り崇福寺に於て法要を營む等。(編者曰く本記事に就て梅野富枝主に感謝す)

### 春山氏三周忌

福岡通商毎日記事抄録 昭和七年二月二十九日所載

郷土史家故春山育次郎氏(柳南院雄峰獨立居士)三周忌は故人と生前親交ありし友人 大熊淺次郎、中村能道、山内修一、梅野富枝四氏の發起を以て廿四日午後二時より市内大學通り横嶽山崇福禪寺に於て法要を執行、多數友人知己の參詣焼香があつた。(編者曰く本記事に就て小田部龍正に感謝す)

郎次青山春故るため營て於に寺福崇原松代千市岡福日四十二月二年七和昭 影撮の同一者會參め始を下閣將中川西理代爵侯田黒及場式要法忌年周三君



柳南山莊主人の三回忌によめる

京都 官幣中社北野神社宮司 山田新一郎詠

柳南山莊  
主人の三回忌  
長らくの  
折々の  
新

春山氏三周年の忌に手向る二首

福岡 筑紫史談會幹事長 陸軍々醫監 武谷水城詠

春山氏の三周年  
の忌に  
折々の  
新

柳南院雄峰獨立居士の三周忌辰にあたりて

東京 元島津公爵家編纂主任 中村徳五郎詠

柳南院雄峰  
獨立居士の  
三周忌辰  
あたりて  
残一おき一  
文の志を  
何と  
徳五郎

### 故春山育次郎君三回忌法要記事

大熊浅次郎 寄贈本



史家春山育次郎君昭和五年二月二十四日を以て長逝し、吾人等舊友同志相謀り、其月二十六日を以て千代松原崇福寺に於て葬儀を執行し、同寺境内に埋葬し、靈屋に位牌を奠め、又分骨を携へて諸佛の淨土なる紀州高野山に到り、奥の院納骨堂に奠め、日牌を大圓院に安置せり、爾後墓碑を崇福寺墓地に建設し、永久に菩提を弔ふ。同年六月三日歿後百ヶ日を機とし追弔法要を営み、墓塔の成るを報告し、踵で故人の生前史界に貢献せる學徳を追慕し、交友諸彦の追憶感想を需め、一篇の回顧録を作り、翌六年二月二十四日一周忌辰の法要を執行し、本回顧録を靈前に捧げて弔慰する所あり。鳥居野火本年二月二十四日正に柳南院雄峰獨立居士の三回忌辰を迎ふ、感慨無量の情に堪へざるなり、茲に崇福菩提寺に於て大祥忌辰の法要を営み、今津勝福寺小田老師を始め一山末寺の衆僧列座諷經回向を嚴修し、先づ黒田侯爵閣下の代理西川中將の焼香に次で參會者一同順次焼香あり。余は一同に代はりて弔辭を述べ併せて大方諸彦より寄せられたる弔電弔狀並に弔詩歌の玉詠を靈前に捧げ修事を了はり、後ち故人の追懷談に時を移し散會せり。

昭和七年二月二十四日

大熊浅次郎 識

左に弔詩歌弔電弔狀を擧げて謝意を表す。

春山氏が誰賞談客として東京の讀賣新聞に連載したる「原采蘋日本唯一の國秀詩人」傳記に共鳴せられたる、京都の北野神社宮司なる山田新一郎翁より電信を以て寄せられたる詠歌前掲短冊並に弔狀左の如し

柳南山莊主人の三回忌によめる 北野神社宮司 從四位勳三等 山田新一郎

なかめにしあるしやいつこいたつらに柳のみこそもえそめにけれ

一筆拜啓仕候陳者明二十四日には故春山氏三回忌御營被成候趣御懇情之至りに候歿後重ての御追遠至れり盡せり春山も無上の友を有したる人哉將又各位の御懇情敬服の外無之候感想申送り候様御下命之處何かと多忙日を逸し申候昨夜枕頭拙句を發し電報いたしたる次第御高恕被成下度御願申上候御訖迄如此候 拜具

二月二十三日夕 大熊先生 臺下 山田新一郎

平野國臣傳刊行を助け校正の任に當り之れを大成させられし、元島津公爵家編纂主任たりし、東京中村徳五郎氏より寄せられたる詠歌前掲短冊左の如し。

柳南院雄峰獨立居士の三周忌辰にあたりて 中村徳五郎 寄贈本  
残しおきし文のしをりのあとしるくきみは百世に生きませるかも

我が筑紫史談會幹事長として故人の史筆に最も信頼せられ其境遇を知れる、陸軍々醫監たる武谷水城八十二翁の詠歌前掲短冊左の如し。

春山氏の三周年の忌に手向る蜂腰二首 武谷水城

散りて早三とせ経てしかもみちやまぬしなき庵やぬしをしのべる (福若曰く故人の柳南山莊以下等國聖山にあり)  
糧絶えて命を筆に寄せし世をかたるもあはれけふの靈祭り

曩に鹿兒島に於て故人の追悼法會を營まれたる發起の一人たりし舊誼ある、中村病院長醫伯中村平輔氏の寄せられたる詠歌左の如し。

春山氏の三周年を偲びて 中村平輔

亡き靈も嬉しかるらむ情ある人より法のまつりうけては

今福岡の市政に執掌せる舊知秦傳次郎氏の靈前に捧げたる詠歌左の如し。

春山氏の靈前に手向く 秦傳次郎  
家も身もすて、つくせしいさはしは年古事ふるごとにあらわれゆかむ

侯爵黒田長成閣下の代理として焼香せられたる福岡別邸參與陸軍中將西川虎次郎閣下の奠詩左の如し。

代黒田侯列春山育次郎君三周忌 無崖西川虎次郎

忌日三周薦白蘋。舊交俱說著書勳。還逢故主傳芳意。一瓣焚香遺墨薰。

扶桑最初の禪窟たる安國山聖福至仁禪寺現住龍淵謙道老師の寄せられたる奠詩一絶左の如し。

柳南院三周諱追悼 龍淵劍光叟

横嶽墓邊冷夕陽。花冰春雪惹愁長。老僧却憶古人句。未聽峽猿欲斷腸。

曾つて當地に官任せし鹿兒島の舊知山口良介氏より寄せられたる追弔狀左の如し。

拜啓時下餘寒今尙烈敷候處益々御清適被爲涉候段奉賀上候當方無事消光幸に御休意被下度候扱故春山育次郎殿事既に三周忌辰に相當來る廿四日御法要御營被成下候趣御報に接し毎々御叮嚀に御追善供養等相成候に就ては故人も嘸哉御安慰冥福之儀に被存小生共も感銘至極に不堪何分遠方參寺致兼候に付萬事宜しく代表諸彦へも同様宜しく御傳へ御依頼申上候時節柄御自愛偏に禱入申候 勿々敬具

二月十九日 山口良介 大熊淺次郎様

故人が曾つて平野次郎と眞木和泉守との關係史料等の蒐集に當り其の勞を煩はされたる久留米の筑後史談會幹事たる黒岩萬次郎氏より寄せられたる追弔狀左の如し。

拜復餘寒料峭之折からますく御壯康爲邦家御盡瘁の段奉大賀候扱生前生後終始一貫御世話被成下候故春山君逝いて早や三周年本月廿四日の忌辰に丁り特に追弔法要御執行被成下候よし故人も嘸々貴下の御芳情に感泣致居候事に拜察仕候老生當日生憎差支有之候間乍遺憾參詣出來兼申候段不惡思召被下度願上候 頓首

二月十九日 黒岩萬次郎 大熊淺次郎様

故人の最も懇親せし博多物語其他博多の史實を書き蒐めさせ、之れを袖の漣瀟沙草と命名して保存せる、河内卯兵衛氏より寄せられたる書面左の如し。

謹啓春山君法要に付御照會を受け不相變御篤志の次第敬服仕候小生今月初旬より保養の爲め此地に參り尙ほ滞在の豫定に有之候間廿四日には參拜出來ず候間不惡御諒恕被下度右御斷迄申入度如斯御座候 二月十九日 草々

篠栗山手にて 河内卯兵衛 大熊淺次郎様

黒田侯爵家より代参の義に付家令時枝誠之氏よりの書面左の如し。

餘寒烈敷折柄益々御活躍之段奉賀候陳者故春山育次郎氏三周忌辰に當り御法要御施行之由拜承早速福岡別邸に移牒し當日は同邸より侯爵様御代理として参拜致し候事と相成居申候尙靈前に香花相供へ候事に候右様御含み置被下度右御通知旁如此に御座候

敬具

一月二十日

時 枝 誠 之

大 熊 淺 次 郎 殿

故人が著せし博文館發行の少年讀本「島津齊彬公」を讀みて最も感興を惹かれ、東京淹留中に初めて春山氏を知り、爾來故人を敬慕せられたる長崎の史家古賀十二郎氏より寄せられたる追弔狀左の如し。

御郵書正に拜受仕候然者故春山育次郎氏三周忌法會御執行のよし光陰如矢はや三年もたち申候併し春山氏は今猶御生存被成候やうに覺え申候御鄭重に三年忌法會御營被成故人靈あらは只管感激被成居候義と存上候尙は春山氏遺稿多々有之へきか右を春山氏の遺著として刊行いたしては如何と存居候慕參いたし度存候も家事其他にてさへられ志を得ず候此度も乍遺憾追悼會に出席不相叶たゞ長崎より心をこめて追慕の意を表し申候

以上

昭和七年二月二十日

古 賀 十 二 郎 拜

大 熊 淺 次 郎 様 函 丈

東京なる編纂事業に執筆せらるゝ國史專攻の文學士堀田璋左右氏より寄せられたる追弔狀左の如し。

御狀拜見愈々御安泰奉賀候扱て故春山翁三周忌御施行被遊候由御案内被下忝く奉存候扱て御奇特の御追憶奉感服候甚乍薄資香奠差出申候間可然御處分奉願候

拜 白

二月二十一日

堀 田 璋 左 右

大 熊 淺 次 郎 様

鹿兒島に於ける少年時代の最も親友として交り、故人が十三四歳の頃明治十年丁丑の役戦歿招魂の祭文の起草を托され直ちに名文を作り、同志を驚嘆せしめたこの追憶を物せられたる、舊知五代彌次郎氏の寄せられたる追弔狀左の如し。

拜啓春寒之候愈々御清安奉賀候然れば來る廿四日故春山育次郎君捐生三周忌辰に相當致候に付ては同日午後二時御地崇福寺に於て法要御營み追慕の意を表せらるゝ由御報道に接し奉謝候同君の事に付ては終始一貫御芳情を垂れさせられ定めて地下に於て感佩致し居り候事と奉鳴謝候小生事一昨年發病以來健康舊に復せず遠行等致兼候に付左様御承知下され度先は御通知かたゞ御厚禮申上候 敬具

二月二十二日

五 代 彌 次 郎

大 熊 淺 次 郎 様 外御一同様御中



故人の遺著に敬服せらるゝ黒田侯爵家々令時枝誠之氏より寄せられたる追弔状左の如し。

拜啓柳南院雄峰獨立居士捐生三周忌辰に當り御法要御營の事御通知に接し深く感激を以て拜承仕候獨立居士御生存中は小生不幸にして拜芝の榮を得ず候へとも居士の史眼文才に於て敬服の至りに堪へざる儀に御座候而して先生が居士在世中より其他界に至るまで又其忌辰の法要に至るまで深厚なる友情を表せらるゝの點浮薄なる現代に於て他に類例のあらざる事と存じ感激に堪へざる義に有之候二月二十四日三周忌の法要に際し遙かに謹みて獨立居士に敬意を表し併せて先生の御高誼に對し感激の誠意を呈し候 敬具

二月二十二日

大熊淺次郎様

時枝誠之



新歸元法名「柳南院雄峰獨立居士」と戒授せられたる、崇福寺前住今は美濃國加茂郡伊深の正眼寺霧隱軒小南老師より寄せられたる追弔電文左の如し。

「柳南院三回忌ニ際シ追悼新タナルヲ覺ユ」

無隱和南



維新史料編纂官たる東京藤井甚太郎氏より寄せられたる追弔電文左の如し。

「春山君ノ靈安カレト祈ル」

藤井甚太郎

東京華國會の末永節氏より寄せられたる追弔電文左の如し。

「遙カニ春山君ノ靈ニ回向ス」

末永節



故人が宮崎の生活時代の知人たる關門日々新聞の主筆加藤七五郎氏より寄せられたる追弔電文並に追弔状左の如し。

「故人ノ靈ヲ祭り諸氏ノ御厚意ヲ謝ス」

加藤七五郎

拜啓益々御清祥大賀々々扱この程は故春山君三周年忌法要御營み御芳志の段故人地下に於て喜び申候事に存候骨肉も及ばざる御親切全く孤獨の故人として實に知己を得たるものと存候次第に御座候小生も參拜致度時間柄多忙失禮仕候感謝之意を表し申候義に有之候、上海事變も皇軍之忠勇にて今日の成果を得候次第ごうやら圓卓會議で大團圓と相成候様子に御座候右は御挨拶まで 頓首

七年三月一日

大熊老兄 梧右

七五郎



曩に故人の舊郷鹿兒島南洲寺に於て營まれたる故人追悼法會發起者の一人たりし、湯地定敏氏より寄せられたる追弔電文左の如し

「本日ノ御催シ縣人トシテ感激ニ堪ヘズ故人モ定メテ感謝シ居ラルルコトト思イマス」 湯地定敏



福岡在住三州人會の一人たる辯護士岩下知敦氏より寄せられたる追吊狀左の如し。

拜啓春寒之砌益々御清祥大慶奉存候然者明二十四日は故春山育次郎氏の三周忌に相當致候由にて御芳情の下に法要御營被遊候由英靈定めて地下に感泣致候事と察申候小生も是非參拜致度存申候得とも昨日來風氣に有之自然參拜致兼候哉にも存申候間不惡御了承置被下度折角の御案内に對し失禮とは存申候得とも書中一應の御斷申上置度如斯御座候 敬白

二月二十三日

岩下知敦

大熊淺次郎様

大阪市外池田町なる故人の令弟伊集院郁五郎氏より寄せられたる追吊狀左の如し。

拜復十六日の郵狀拜見御病症御困りの御様子御静養被成度候二十四日は又愚兄の爲め三周年忌法要御催し被下候由當時は私共左記の事故により自由ならず只病室花臺に水菓子や餅菓子を心許り相供へ遙に彼の冥福を祈禱致候種々の御配慮毎も奉鳴謝候私妻の舌癌並に胸部手術の爲め一月二十一日以來當病院へ入院治療致經過良好に有之候何れ退院の上は御消息可申乍延引追吊の微意申述度如此御座候

二月二十八日

拜具

大阪大學病院病室 伊集院 郁五郎

大熊淺次郎殿

# 附 録

先年其日庵主杉山茂丸翁博多灣築港計畫の事を以て福岡に來り、東公園地畔三角の寄中庵に僑居す、文墨の嗜癖あり、閑適之餘、末た弘く名を播せざる村田東圃の畫風を愛賞す、曾て故桂谷下條正雄先生の鑑賞によりて更に愛重せられ、市井の間畫幅頓に貴し、而かも東圃の經歷を詳かにするもの尠し。余は當時春山育次郎氏に囑し、畫伯の資料を探り概蹟を叙せんことを以てす、氏喜んで之れを諾し稿成るを告ぐ、余亦東圃の高弟松尾耕雲翁本名吉平の在世中大正十五年十月十五日受享年八十六就て聞く所あり、之れが補正をなし、略傳として大正十五年七月之れを東京に於ける其日庵發行『黑白』雜誌に發表したることあり。畫名益々喧傳せらる、東圃は實に天下の畫才たり、今亦遺稿を推校し、茲に故春山育次郎君三回忌法要に際し、追慕の一端に資する爲め、法要記事の附録として江湖の一粟に供するものなり、幸に斯界の參考ともならば故人亦本懐とすべきなり。

昭和七年二月下澣

大熊淺次郎識

## 筑前畫家村田東圃略傳

(禁轉載)

一一

故春山育次郎 著

### 一、家系並ニ父母

村田東圃、名は瓊、字は子璧、東圃と號す、別に紫溟釣徒、墨江遊人等の號あり、通稱瓊一郎、また左一郎の字を用ゆ。博多の南郊春吉村の百姓、鋸屋儀兵衛の季子なり、鋸屋苗字は倉成その祖先は肥前の人なり。父儀兵衛の名、或は儀右衛門なりしと云ひ、或は善兵衛なりしと云ふ、過去帳位牌の徴とするに足るものなければ、得て明確なり難し。

鋸屋の苗字は倉成を稱したるも、始は佐藤を苗字とせり、佐藤肥前國養父郡の由緒鄙しからぬ舊家にして、大庄屋の職を勤めたり。中世の頃、藩主鍋島家の旨に忤ふことありて、御尤を蒙り、退國して筑前に來り、上座郡志波に住民となり、後ち出て、春吉に居り、鋸の齒をひくを業とし、頗る精練の名あり、曾つて藩主黒田家に於て、大筒を修理せられし時、召されて御用を勤め、成績最も優れしかば、特に嘉賞せられ、三人扶持をも賜はりしが、如何なる故やありけむ。此時より佐藤の苗字を更めて倉成を稱し、後ち分れて數家を成せり、東圃の父儀兵衛は、肥前より來りたる本家の子孫たる

歟、將た分れて別家を成したるものゝ子孫なる歟、また明確ならざるも、舊と肥前より來り、後ち分れて數家を成したるものゝ一なるは蓋し事實なり。

東圃の父儀兵衛は、春吉の庄屋なりしと云ひ、或は目明なりしとも云ふ、東圃の住居したる七軒家の宅と、軒を接して東圃の兄に當る人の家あり、目明を職としたりといふを以て考ふれば、東圃の父また目明たりしと爲す説、寧ろ實を得たるに似たり、或は曰く東圃の住居せし七軒家は、即ち鋸屋の世々住居せし所にして、東圃の生れしも此處なりと、七軒家今は博多の瓦町に屬すれども、往昔春吉村の一部にして、農民の居りし所なり、此説或は然らむ、蓋し東圃の家は半農半工にして、或は庄屋の職をつとめ、或は目明の職をもつとめたるもの歟。要するに微賤なる農家より起りたる畫家なれども、必ずしも全く氏も素性もなき水吞百姓の子弟にもあらず、父祖は聊か村内の公事をも與り知りて口を利く人なりしなり。

### 二、出生當時の異聞

東圃の父母同胞等の事は、悉く皆泯滅して全く傳ふる所なし、唯二三の緣故ある家に残れる傳説の一致する所によれば、東圃の父は男女十二人の子あり、東圃は最季の子也、而して享年六十四より逆算すれば、享和二年を以て生れたる人なりしを知るのみ、生れたる月日の如きは今全く之を失ふ。

東圃始めて生れし時、兒女多きこと斯の如く、然かも家道頗る微々にして育すべからず、因て相謀りて、密に之を棄てむと欲し、母親抱いて家を出づ、適々二十三夜の月、恰も出でて嬰兒の顔を照す、母親その微笑せるをみて、愛憐の情切なる者あり、歩を進むるに堪へず、乃ち踵を旋して歸へり、次で易者をして之を占はしむ、易者筮して曰く、此兒、後ち當さに顯達せむ、善く意を用ひて愛育すべし。成長せば尋常農家の子を以て待つべからず、宜く讀書習字を旨として稽古せしむること好けれど、父母是に於て平體する所あり、撫愛他兒に越ゆ、東圃また齡や、長するに及び、繪を觀、筆を弄ぶことを喜び、自ら好みて畫工となれり。

### 三、畫の師授

東圃初は秋月の齋藤秋圃を師として技を學ぶ、秋圃は晩年また南宋の畫風をなしたれども、素と應舉の門流にして、圓山派の畫家なり、東圃次で京都に出で、暫く松村景文の門にも入りたりと云ふ、此間の消息未だ詳ならざるも、作品の間、往々元明の諸家を折衷して、自ら一家を成せる晩年とは、全く趣を異にし、全く四條派の風格を帶ぶるものあり、松村景文に従遊したる傳説の誤らざるを考ふるに足る、而して沈實謹厚にして、苟もせざる筆致、また早く已に之を認むるを得べし。

### 四、結婚成家

東圃歳四十に近くして、博多橋口町の文具商、村田治右衛門行應の養子となり、長女に配し、是より村田氏を稱す。(本居宣長の門人帳に博多村田仁吉の名あり蓋し村田治右衛門行應なり、)村田の祖先、舊と長州の藩士なり、事を以て食祿を喪ひ、筑前に來りて遠賀郡の蘆屋に住し、後ち博多に移りて町民となり、數傳して治右衛門行應に至る。製墨を業とし、藩主黒田家の御用を承はる、堂號を常春園といふ。

治右衛門の長女千哥寛政十年を以て生る、年少にして敏慧最も姿色あり、治右衛門乃ち藩主黒田齊清公の内廷に納れむと欲し、先づ師を求めて武藝を習はしむ。千哥女皆能く成熟し、鎖鎌と薙刀とは、特に免許皆傳の妙を得たり、是に於て平徳瀨する人あり、齊清公の生母、眞妙院の博多濱に舟遊を試みらるゝを機會とし、千哥女をして事に托して技を演せしめ、以て眞妙院の覽に供す、眞妙院は素と上州の郷士、渡邊忠藏の女なり。十四歳の時、入りて藩主齊隆公の側室となり、次で乾龍院齊清公を生む、歳十九齊隆公を喪ひ、是より鳥飼村の邸にあり、寡棲數十年、賢明貞婉の譽あり、深く士民の尊敬を受けたる人なり、されば千哥女の父は、武藝の熟練を感賞せらるべしと思設けしに、眞妙院は以の外の不興にて、武藝は士人の事也、況や町家の女子にて、斯かる業を習ふこと、此上もなき心得違也と言はれて、散々の體なりしかば、奥勤の望全く水泡に歸したるのみか、世間の物笑となりて親も子も面目を失へりと云ふ。

是に於て千哥女は、父の意を承けて、京都に上り、製墨の老舗を以て著名なる、常春園に見習の名

義を以て、寓托すること數年、此間名人の師を求めて、裁縫刺繡の技藝を學習し、且つ製墨の秘方をも傳受し、常春園の商號を稱する允諾をも得て、博多に歸り、家業を擴張せり、されば常春園の娘とて誰知らぬ人もなき評判娘なりしかど、斯かる優れたる女性とて、似合はしき縁談を得ずして、齡漸く老けむとする頃、東圃は文具の事を以て出入し、何日しか相思の情切なる者あり、後には聊か人の目に著けりしかば、東圃と親交ある寺田榮八、土生伊平の二人、是れ最も好適の縁談なりとて、兩家の間に立つて斡施し、櫛田宮の神職祝部陸奥守また助力する所あり、東圃を常春園の養子として事は諧ひたり、寺田榮八は元衆議院書記官長寺田榮の養祖父なり、土生伊平は大熊淺次郎の外祖父也、東圃と同じく春吉に生れたる人を以て、多少文墨の嗜癖あり、平生親交したる間柄なりしと云へり。東圃の常春園に入りて、千哥女と相婚したる干支は明白ならず、千哥女の自ら生める唯一の子香谷が、天保二年の出生なるを以て考ふるに、文政の末若くは天保の初なるべし、千哥女齡東圃より多きこと四歳、即ち東圃は年三十千哥女は三十四歳の時なりき。東圃が千哥女と婚する以前の事蹟は、全く泯滅して知るべからず、唯松村景文に従遊したりと云ふを聞くのみ。然れども方には是れ壯強、最も技を練るの年輩なれば、師を求めて京都に上りたる外、諸方の遊歴をも試みたることあるべし、長崎は當時の文人墨客の必ず足を着くる地にして、元明諸名家の作品を展觀する畫家に於ては、全く然りしを以て、當時また一時若くは數次、長崎の遊ありしを思ふも、此間の消息また杳として一も傳ふる所な

し、千哥女と婚して村田氏を稱したる後は、暫く橋口町の常春園に同棲し、次で那珂川の東涯七軒家に小屋を營作して移り住めりと云ふ、即ち終生閑居して老ひ、且つ死したる所也。されば四十以後の二十餘年間は、隣國近郡の出遊は暫く別とし、遠方の遊歴等を試みたる事實なかりし歟

### 五、畫風變遷の徑路

東圃の畫風が、圓山派より四條派に移り、次で元明の南宋畫家を尙慕し、終に自ら一家の風格を成すに至りたる徑路年代の如きも、今得て詳にすべからず。東圃の作品は、之を作りたる年月場所を識せる者甚だ少く、落款最も簡粗なるを以て、作品に就て此間の徑路年代を考證し難きは頗る遺憾とす。

東圃の作品、就中山水以外の作品を觀れば、圓山派、四條派の筆致を存するは、争ひ難きものあり、晩年の製作猶ほ斯の如きを考ふれば、之を稱して尋常の南宋畫家と爲すは固より當らず、元明の諸家を折衷して、自ら一家を成せりと爲すの甚だ穩當なるを覺ゆ。唯その中年以後、深く元明諸家の畫を尙慕し、粉本を此に取りて、極力描寫に勉めたるを見るも、亦た是れ南宋畫家の一人たるを奪ふべからず。斯の如く南宋の畫風を尙慕するに至りたるは、必ずしも晩年にあらず、文化文政の頃は、我國の畫界漸く一革新の時期に入り、南宋を宗とする者、漸く競ひ起り、結局謂ふ所の文人畫にあら

ざれば、幾んど畫にあらざるが如き、天保以後の氣運を生じたと相照らし、東圃また中年以前を以て、早く然りしを思はしむ。然かも聲名多く郷閭の外に出でず、郷閭に於ても人多くは石丸春牛の才氣あるの作を稱し、東圃の沈實謹厚を稱せざりしは、東圃は彼の文人畫家として、概ね兼ねて之あるを常としたる、學問詩文の素養を缺けりしが故のみ。東圃平生自ら善く此間の事理を解し、自ら學問詩文の素養なきを遺憾とするの情、最も切なる者あり、子香谷に至りては、此悔恨なからしめむと欲し、師を求めて力を文學に致すことを奨勵し、最愛の一人子なりしに拘はらず早く上洛せしめたりと云へり。

## 六、七軒家の二十年

東圃七軒家に居りて、技を賣ること二十餘年。聲聞は實際の技倆と相副はず、是れ前に述べしが如く、學問詩文の素養なかりしが爲なりし、居る所の邊陲にして、實際の技倆を鑑別する人なきもの、抑々また一の理由なり、東圃また自ら知る所なり、是に於て乎、子香谷の業粗ぼ成りて歸省し、重ねて上洛せむとするや、親子三人相携へて博多を去りて上洛し、鳩居堂の周旋を以て、富小路に借宅を構ふ是れ京都に居ること十餘年なりき。

東圃の親子三人相携へて上洛したる年月及び洛に居りたる期間は未だ明ならざるも、各種の情況より考ふるに、上洛したるは嘉永の末安政の初、齡五十を越へたる後なりしは争ふべからず。従つて洛に居りたる期間は十年前後なるべし。

## 七、京都の十年

東圃の京都にありたる、十年前後の消息また甚だ漠然たれども、畫名終に振はず、生計の如きも主として妻千哥女の裁縫刺繡の師としての収入に依りて維持せらるゝの情況なりしは事實なりとす。當時は南宋畫全盛の時代にして、此派の畫家は概ね學問詩文の力と才とを兼ねて翰墨の筵に臨み、或は描き或は題して縦横揮毫するを常とし、畫名また此間より振ふこと多きを風としたるを以て、東圃の如く學問詩文の素養なく、且つ久く邊陲に居りたる田舎畫師は、縱令實際の畫技は卓越なるものありとするも、聲譽を播すの道なかりし也。三十餘年の間に於ける作品は、未だ之を閱するを得ず。此間の揮毫また固より尠きことなかりしは、恐くは一個無名の田舎畫師の作品として遇せられ、多くは蠶魚の食むに任かせて今存する者多からざるべし。

此時に方り子香谷、成立したりと雖、畫名は未だ一家の生を支ふべからず、獨り千哥女の裁縫刺繡の技は、洛人を驚嘆せしむるに足る者あり、及門の女子甚だ多く、朱門大家の延請また常に絶えざりしを以て、纔に自ら給するを得たり。然かも猶ほ是れ纔に寒素の生を營むに堪たりと云ふのみ、家計

豊裕ならざりしは、老を告げて歸臥するに方り、道途の資金十三兩を他人に借りて之を辨じたる事實之を證して餘あり。

## 八、歸臥

東圃夫妻が、老を告げて京都を去り、瓦町の舊草廬に歸臥したるは、文久三年の春、東圃六十二歳妻千哥女六十六歳の時なり、夫妻並に老來りて墳墓の地を懐ふの情あるのみならず、此頃天下多事を告げ、京都に文人墨客の優遊を容る、難き時勢となりたるが爲なるべし。而して東圃は瓦町の草廬に歸臥して、未だ數年ならず、忽焉として逝けるをみれば、此畫家は即ち骨を故郷の舊青山に埋めむとして歸來したるの觀あり。

石丸春牛曾て老年の故を以て藩主長溥公の特旨を以て内謁を賜はり、席畫を命せられたる事あり。春牛市井の一畫工を以て斯くの如く恩榮を蒙りたるに感激し、唯涕淚潛々たるのみ、終に筆を揮ふこと能はずして退けり、東圃は春牛より齡少なきこと九歳、二人は畫の風彩系統を異にすれども、知音故舊、種々盡力して之を謀りしかば、長溥公また引見して内謁を賜ひ、且つ杉戸に揮毫を命せらる、此時東圃の描ける杉戸は、今猶ほ濱町の別邸にあり、春牛及び東圃の長溥公に謁したる年月は、今之を逸するは老年の故を以て内謁を賜はりたるものなるを以て、六十一歳以後なりしは幾んど疑ふべからざるものあり。東圃の賜謁の事は詳悉ならざるも、蓋し京都より歸へりたる後にして春牛と同く六十歳を越へたる頃なり。當時の町奉行濱兵太夫の記録は多少の徴憑とするに足る。

## 九、易簣並に享年

東圃は慶應元年二月三日急に卒中の症を發し、醫藥を呼ぶの暇もなくして頓死せり、時に歳六十四子香谷は、是より前數年、千哥女の門下生なる京都人と婚し、妻の實家に同居して、上柳町に住し、東圃の嗣たりしを以て、姓は更めざりしも、幾んど養子の狀を爲して、東圃夫妻とは別居せしを以て、留りて歸らず、故に常春園の主人以下親族故舊千哥女を扶けて喪事を修し、下祇園町の順正寺に葬る、香谷歸來せざりしが、親族にして門人なる、秋江香雪等他の親族門人等と相謀り、資を贖して墓を建つと云ふ、今猶ほ存するもの是也。妻千哥女は東圃に後ること六年、明治三年十月二十二日を以て歿す、享年七十三、東圃の側に墓あり。

## 十、順正寺の墓

順正寺の墓地に存する東圃夫妻に録する所左の如し。

表面

東圃居士之一墓

側面 慶應元年二月三日

本堂の後にあり、自然石にして此他何の記載なし、過去帳には光盛齋壽山とあり。千哥女の墓は東圃の墓の右にあり。

村田千哥女之墓 明治三年十月二十二日

同じく自然石なり、並に享年等の記載なければども、千哥女の墓は額に上羽の蝶を刻し、且つ墓を建立したる女弟子十數人の氏名を刻し、傍に小形の石燈籠あり、此は千哥女の教授を受けたる、福岡の上士諸家よりの寄進にして、同く寄進者の苗字を刻せり、明石氏、桐山氏、久野氏、倉八氏、衣非氏、隅田氏、花房氏、矢野氏等すべて十餘いづれも重臣高祿の家也、又博多商家の門人子女の建てたる石燈籠あり。此他に左の二基あり。

表面 清風齋秋江居士

裏面 明治二十三年九月十八日

即ち村田秋江の墓也、秋江は千哥女の甥也、東圃に従ふて書を學べり、東圃夫妻之を視ること香谷の弟の如く、年少の時より家に迎へて教育せり、書も相應に出來たれども、聲名揚らず窮死せり享年五十三

表面 釋行願信士

裏面 明治八年二月十有七日 年二十八才 村田香雪

香雪は秋江の弟也、同く東圃に就て書を學べり、夫妻は實子の香谷、京都にありて歸來する模様なかりしかば、養ふて嗣とする意ありしと云ふ、頗る將來に望を屬せられしが、心疾を患へて瘦死せり。元來順正寺は東圃の實家鋸屋の寺なれども、東圃の父母等の墓は認め難し、家門の衰微の爲に湮滅したるものと覺ゆ、寺に於ても全く知る所なし、千哥女の實父母村田治右衛門夫妻の墓は、普賢堂町西教寺の後にあり、父治右衛門は安政三年二月二日八十六歳を以て歿す、母は其年三月七日七十九歳を以て歿す。

### 十一、嗣子村田香谷

村田香谷、幼名を實太郎といふ、後ち名を叔と更め、香谷と號す、別に蘭雪適園等の號あり、東圃夫妻の間に生れたる一人子也、天保二年三月四日博多の家に生る、書は始め父を師として學び、次で長崎に遊び、鐵翁を師とし、且つ清客徐雨亭の教を受く、年少の時より京都に出でて當時の諸名家に親炙し、詩書並に名あり、文久二年三十二歳の時、京都の人大路千枝女と婚して家を成せり、生平最も煙霞の癖に富み、常に放浪の遊を事とす、明治の世に及び支那に遊ぶこと前後三回也、明治二十四



年家を東京に移し、居ること十餘年、明治三十七年また大阪に移り、大正元年十月八日歿す、享年八十二、長柄の墓地に葬る、嗣子龍太郎後を承く。

### 十二、七軒家の故居

東圃の久く住せし瓦町七軒家の故宅は、今尚ほ存す、店付の家となりて、模様も全く變し、且つ甚だしく住み荒したれども、大體の構造は昔の儘なりしと覺ゆ、第一の座敷は、四疊半の小室にして川を見渡せり、外に三間はかりあり、孰れも三疊四疊の小室なれども、昔は小奇麗にして、風雅の趣を具へしかと思はるゝ面影は、猶ほ聊か残り、七軒家の地今は家屋兩側に建て列らなりて餘地なく、川幅も埋立て、狭まき、極めて俗惡の境となりたれども、昔は僅かに數軒の茅屋あるのみにして眺望よく、東圃の住宅の座敷よりは、大小八ツの橋を望むを得たりと云へり。而して東圃の住宅は、簡素なる茅屋にして、草葺の屋根には楯鉢など載せあり、老柳枝を垂れて川に臨み、如何にも風雅人の住居らしき家なりき、

香谷が慶應二年の秋、東圃の歿後一年久振に歸省して、暫く母親と同居したる時の詩數首あり、

丙寅九月到博多還舊宅

又結家山未了緣。柴門今日淚潸然。一株老柳同吾瘦。閱歷風霜二十年。

### 新涼

一洗塵埃宿雨晴。半簾秋氣覺風清。暑從梧影疎邊退。涼向蟲聲多處士。

困夢俄蘇病翁喜。夾衣未成懶妻驚。笑吾杯杓久拋却。今日相親太有情。

老柳は今已に無けれども、猶ほ記憶し居る人あり、且つ隣壁界限も、人家櫛比して、俗惡を極むれども、當時までは梧影疎邊も蟲聲多處も全く實際の境たりしなり。

東圃の畫格畫風に對する鄙見、及び一生の逸事等、尙ほ叙すべき者多し、配子哥女に至りては、亦た是れ一個の傑女、永く傳へざるべからざる事蹟に當む、今や委曲を盡すの暇なきを以て、暫く諸を擱く。

大正八年八月十一日夜

春山育次郎識

昭和七年四月六日印刷  
昭和七年四月十三日發行

(非賣品)

福岡市大字住吉三百六拾番地

著作兼 發行者 大熊淺次郎

福岡市大字住吉壹番地

印刷者 石井利吉

福岡市中島町壹番地

印刷所 株式會社共文社

電話三三五番

終

